

公共事業に人生を捧げた加納久宜

立派な人物の定義を、加納久宜に尋ねれば、おそらく、

「私利私欲のない者をいう」

と、即座に答えたに違いない。

この人物は、筑後国(現・福岡県南部)柳河藩主・立花筑前守種善の甥に生まれている。十九歳のおりに望まれて、上総国(現・千葉県中部)一宮藩主・加納大和守久徴の養嗣子となった。従五以下・遠江守に任ぜられたものの、幕藩体制は束の間、翌年に、明治維新の大業が成る。

久宜は新政府のもと、一宮藩知事となり、明治六年(一八七三)には文部省へ出仕。やがて学生が決まってストライキをするという、新潟学校長に赴任する。

着任時に、彼はいった。

「予が肩書きの身(従五位下)で、とくにここに来たからは、もし、君たちが学生の本務を誤るにおいては、予は教育界の名誉のために、

すべての学生を放逐する、その位のことは朝飯前である」

学生たちは久宜の出自を知り、なおかつ、己れにも厳しいその人柄に接して畏敬の念を抱くと、以後、ストライキは止む。

明治十四年、司法畑へ移り、明治二十七年、再び嘱望されて鹿児島県知事に転身した。

この頃、鹿児島県の財政は膨大な赤字を抱えていた。

久宜はすぐさま、知事自ら執務時間の五分前には登庁し、帰りも他の官吏より長く執務する。早出晩退主義を励行。官吏の襟を、自ら模範となつて正した。

また、歴代の知事も訪問し得なかつた僻地の巡視を実施し、県民に納税への理解を深めてもらうため、幻燈機(映画)を携え、音楽隊を率いての、PRの陣頭にも立っている。

農事改良のために久宜は、札幌農学校卒の農学士・岩崎行親を、

かのうひさよし

加納久宜

県の尋常中学校長に招聘し、柑橘類と桑園・茶業・牧草園・畜産などの、大がかりな改良を県内のすみずみで実施した。

「勸業道楽知事」

と呼ばれ、批判されても、彼は一切を気にとめることなく、殖産興業の基礎が整うと、次には教育振興に大鉈を振るつた。

だが、こうした久宜の積極奨励策は、一方で県財政の瓦解につながった。彼は私財をなげうって、これを補填した。

久宜が鹿児島県に投じた金は、数十万円の巨費に達していたばかりか、退職の際には二万円の借財を抱えていたという。内閣総理大臣の給料(年俸)が、約一万円の頃のこと。あまりのことに、親戚や旧臣会議がみかねて、むりやり久宜を辞職させた。明治三十三年九月のことである。

しかし、彼の方針は、その後の



PROFILE

加来 耕三氏

奈良大学文学部研究員を経て、現在は大学・企業の講師を務めながら、歴史家・作家として、独自の史観に基づく著作活動を行っている。その他、専門知識を駆使し、時代考証はもちろん、テレビ・ラジオ番組で監修・構成・出演などを幅広く手がけている。

鹿児島県を決定づけたといつてよい。

大正八年(一九一九)二月二十六日死去。享年七十二。

久宜の遺言は、

「二にも公益事業、二にも公益事業、ただ公益事業に尽くせ」というものであった。こういう立派な生き方も、あったのである。

(了)

